

# 盆踊り漫遊

竹中尚文

## 第4回

### 3. 一世の時代

1885年(明治18年)に明治政府によって移民が解禁されましたが、最初に渡ったのは、出稼ぎ者がほとんどのようです。出稼ぎ者とは、単身でハワイやアメリカに渡って、一財産を貯めて「故郷に錦をかざる」ように帰国するのが目的であった人たちです。出稼ぎの目的はお金を貯めて帰郷することなので、ハワイやアメリカ大陸に永住を目的とする移民ではありません。当時の外務卿であった井上馨が収入の四分の一を貯蓄に回して、故郷に送金をしてくれたらと期待をこめた発言がありました。(『我が国民の海外発展／移住百年の歩み』外務省領事移住部)また、明治26年の広島県知事がハワイに渡る県民への論告で、しっかり働いてお金を儲けて、故郷に帰ってからは、安楽に暮らすように、と述べています。

おそらく当事者も同様の目的意識、海外でしっかり稼いで「故郷に錦」という思

いで、ハワイやアメリカ大陸に渡ったのでしょう。だから、渡航者の多くが若い独身男性が多かったのです。職種や渡航先の個々の事情で異なりますが、日本での給料の4～5倍だったそうです。先に渡航した人が同じ村人を呼び寄せることも多かったようです。そうやって村人の多くが渡航した村を「移民村」とか「アメリカ村」と呼ぶようになったそうです。事前に渡航先の事情を入念に調べたり、英会話の練習を積んだりしたわけでもありません。何より潤沢なお金を持っていたわけでもありません。異国の地で心細さを強く感じたでしょう。先に渡航した者は同じ村の人を誘い、後から渡航する者は同じ村の人を頼ったのでしょう。

ところで、アメリカに渡った人々がついた職業は、農業や漁業や缶詰工場や鉄道保線などの肉体労働でした。アメリカ大陸横断鉄道は、1869年(明治2年)に完成をし

ますが、その建設労働者の多くが中国人でした。日本人がアメリカ大陸に渡った頃は、労働者が余り気味でした。現在のアメリカ合衆国のカリフォルニア州でスーパーマーケットを訪れた人はご存じでしょうが、驚く程に野菜の種類と量が豊富です。カリフォルニアの農業を変えたのは日本人及び日系米人だといわれています。19世紀までのカリフォルニアでは、広大な土地で、羊や牛を飼う牧場が中心であったそうです。そこへ日本人は労働集約型の農業を持ち込んだのです。野菜や果物を栽培したのです。映画『ヒマラヤ杉に降る雪』の中で描かれる日本人は、漁師であったり、イチゴ農家であったりします。戦前の日本人移民や二世に対するイメージは、果実野菜農家や漁師でした。

こうした出稼ぎ者の中には、首尾よく蓄財もできて、故郷に帰った人もいます。しかし、そんなにうまくいく人ばかりではありません。収入は日本と比較して4〜5倍であっても、生活費はその土地で生活をする費用ですからそれなりにかかるものです。井上外務卿のいうように収入の25%を貯蓄にとというのは困難なこともあります。

出稼ぎに渡った人の多くは、そんなに容

易にお金を貯めて「故郷に錦」を飾れませんでした。懸命に働いても大きな貯金ができないので、人々の滞在期間は長くなります。すなわち出稼ぎから定住になります。帰らずに定住し始めた人々と新たに日本からやってくる移民の増加により、アメリカ社会、特に西海岸の州で日本人労働者が目立ち始めました。そうすると、日本人排斥運動が起きるようになりました。それは、以前から中国人労働者への排斥があり、アジア人蔑視が深化したように思います。

そのような社会の中で、象徴的に語られるのが1906年(明治39年)の「サンフランシスコ日本人学童差別事件」でした。この年、サンフランシスコでは大規模な地震が起きました。この地震で市内各地の小学校が被災したので、それを理由に市当局が日本人生徒に対してのみ郊外の通い難い学校に転校するように迫りました。当時、日本人は家庭をもって暮らす人は少なく、日本人学童は全学童の0.4%程だったそうです。日本人学童が復興の妨げになったのではなく、隔離を計ったのです。この問題は、国際問題となり日米両政府の動くところとなりました。アメリカ政府は、サンフランシスコ市に隔離を撤回させました。これに応じて、日本政府は移民の自主的制限

を始めました。これを「紳士協定」と呼び、1907年(明治40年)－1908年(明治41年)にかけて結ばれた協約のことです。

この「紳士協定」と共に語られるのが、「写真花嫁」という言葉です。最近では映画の邦題で『ピクチャーブライド』とそのまま記されることもあります。「紳士協定」によって日本からの出国を自主規制するはずでした。「地域別海外移住者数」(文末グラフ参照)のグラフにあるように、1909年(明治42年)に北米に移住した人数は激減します。しかし、翌年から渡航者数は増加を始めます。この「紳士協定」は機能しませんでした。「紳士協定」では、アメリカで暮らす人が家族を呼び寄せることを認めていました。アメリカで暮らし始めた人は、日本から妻を呼び寄せたのです。一時帰国をして、結婚相手をさがし、結婚式をすませて、二人で再渡米する人もいましたが、かなりの費用と時間のゆとりのある者だけでした。多くの場合、日本に居る縁者に「写真」と「釣書」(自己紹介状)を送って花嫁候補を捜してもらうのです。それに応じてくれる人があれば、アメリカに女性の「写真」と「釣書」を送ります。双方の同意が得られれば、日本で花婿不在の結婚式を挙げます。花嫁はひとりで写真を握りし

めて、アメリカに渡っていきました。

当時、アメリカといっても特に西海岸では東洋人に対して迫害をする機運に満ちていました。その情勢の中で、日本人はアメリカに帰化できない、また日本人はアメリカ人と結婚できないという法律がありました。当時のアメリカ在住の日本人は、アメリカの市民権を持つことが出来ず、日本国籍を有するだけでした。だから彼らは本籍を日本に置いたままでした。従って、本人が不在のまま日本で結婚式をすることが可能でした。

結婚や家族に対する考え方は、その地域や時代によって異なります。当時の日本で合法的に結婚をしたことが、アメリカの社会では受け入れがたいようでした。偽装結婚や女性の人身売買ではないかと、疑われます。そうした中で、入国の際に保護のために女性を保護拘留する事態が起きます。日本領事部はこうした事態を避けるため、日本から新婦が到着するとすぐにキリスト教の牧師に依頼して結婚式を挙げました。このことに対して、在米日本人からキリスト教の押しつけではないかと抗議の声があがりました。そのため、牧師と浄土真宗本願寺派(前述のように、1899年以降、浄土真宗本願寺派だけがアメリカに開教していま

した)の僧侶をよんで、本人たちの希望する宗教での結婚式を挙げました。(『アメリカ西部開拓と日本人』NHK ブックス鶴谷寿著)

「写真花嫁」としてアメリカに渡った女性について、私たちはステレオタイプのイメージを持つべきではないでしょう。彼女たちは、結婚と共に海外移住をするのだから、その動機に経済的理由を想像しがちです。日本で生活するのが苦しいから海外移住をする、というのは否定できません。それ以前に海外移住をした人たちのほとんどは、経済的理由だったでしょう。しかし、「写真花嫁」たちはそれだけではありませんでした。柳澤幾美氏は、彼女たちについて当時の結婚年齢より高めであることと高学歴の女性がかかなりの割合でいたことを指摘しています。(「写真花嫁」たちのオーラル・ヒストリー」『JICA 横浜海外移住資料館研究紀要』3)この結婚年齢が高め、ということについて、最近では「結婚適齢期」などという言葉が消えて、少しは生きやすくなったように思います。明治末から大正初めの日本においては、結婚適齢期というものがあつたのでしょう。当時、日本の多くが農家でした。農家では、息子に嫁が来れば新たな働き手が増え、娘は口減らしのようにして他家に嫁いで欲しい年齢、それが結

婚適齢期であつたように思います。アメリカに渡るといふのは、呪縛のような結婚適齢期から逃れる手段であつたかもしれません。

また、高学歴の女性がかかなりの割合で含まれて居たことは、彼女たちの渡航理由が経済的なものとは言い切れません。当時の家族というものは、家制度に縛られていたと思います。未婚の女性の意見などいえる機会もなかったでしょう。彼女らは、女性としてもっと制約の少ないところで暮らしたかったのかもしれないと思います。

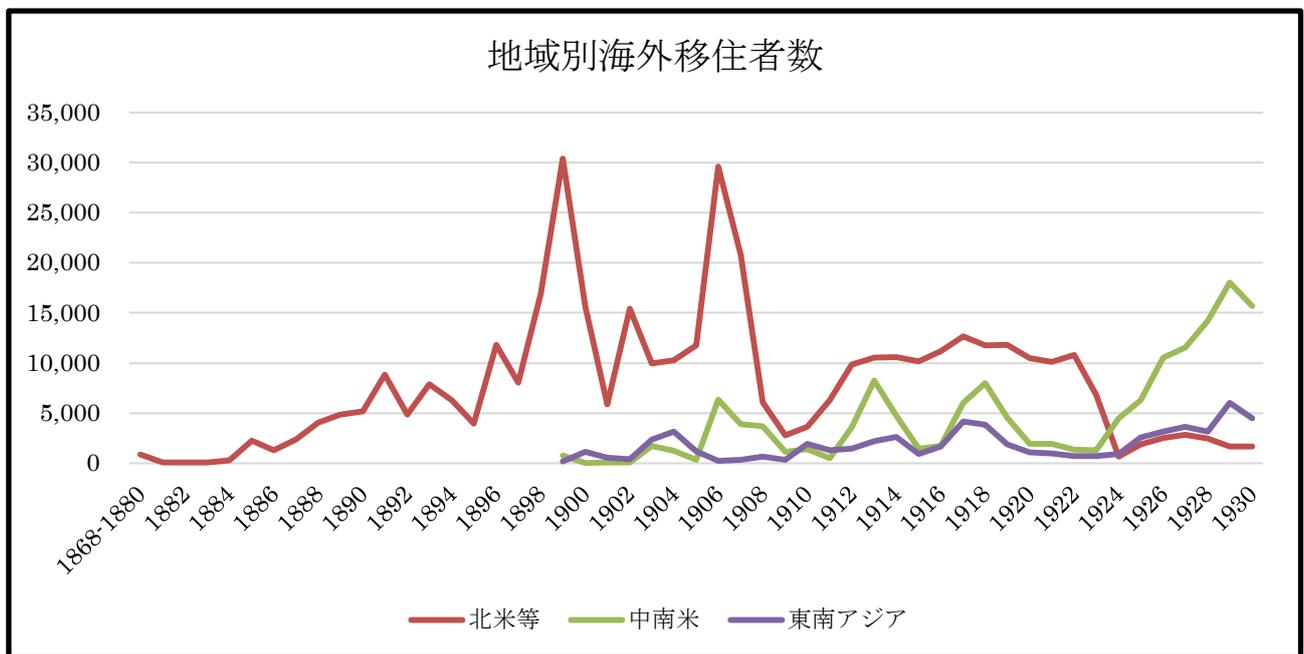
ここで少しこれまでの話をまとめたいと思います。「写真花嫁」という言葉は日系米人の歴史を語る上で欠くことの出来ない言葉です。彼女たちの存在が、白人を中心としたアメリカ人の東洋人に対する差別意識を浮き彫りにしました。当時の移民の国アメリカでは、ヨーロッパ諸国に対して写真で故郷から花嫁を迎えることを認めていました。一方で、日本から大挙して押し寄せる女性に対して、アメリカは驚異を持って見つめたのでしょう。

また、彼女たちの存在が、渡航者を一世にしたのです。初めにアメリカに渡った人たちは、出稼ぎに行ったのです。いつかは日本に帰るつもりでした。ところが、彼女

たちが渡米することによって、家庭を持つようになりました。すなわち定住するようになったのです。家庭を持ってアメリカで暮らします。子供が生まれます。二世の誕生です。

北米への移民歴史は、その後の南米移民の歴史と異なります。南米に渡った人たちの多くは家族で渡っています。また、その時期も一定ではありません。一世でもいろんな時代の一世代がいます。しかし、北米に

移民した人たちは、先に男性が単独で渡り、1910年頃から女性が渡航して家庭を持つようになります。1910年代から1920年代にかけて二世が誕生しています。和暦でいえば、明治生まれの人たちが一世で、大正から昭和の初めまでに生まれたのが二世です。そして、戦後に生まれたのが三世になります。



外務省領事移住部『わが国民の海外発展 移住百年の歩み(資料編)』の資料よりグラフを作成した。